

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34402

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00153

研究課題名（和文）戦前のおける大阪におけるラジオ放送と音楽趣味の形成

研究課題名（英文）Radio Broadcasting and the Formation of Musical Taste in Osaka before World War II

研究代表者

西村 理（NISHIMURA, Osamu）

大阪音楽大学・音楽学部・教授

研究者番号：00552738

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前に大阪放送局（JOBK）が制作した音楽番組を調査し、当時の大阪の人々の音楽趣味の形成を考察した。まず、オーストリアの作曲家で指揮者のヨーゼフ・ラスカ（1886-1964）、ヴァイオラ奏者で指揮者の朝比奈隆（1908-2001）、ロシアのヴァイオリニストのアレキサンダー・モギレフスキー（1885-1953）が出演した音楽番組を明らかにした。次に、新聞の「ラジオ欄」の言説からラジオの聴取者が、演奏家や演奏曲についての情報を得ていたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、1925年からラジオ放送が本格的に開始された。日本のラジオで放送された音楽についての研究の多くは、東京放送局（JOAK）を軸に行われてきた。1928年11月からは全国中継放送が始まったものの、1934年6月までは各放送局の独自性は保たれていた。本研究では、大阪放送局（JOBK）が制作した音楽番組を調査し、それらに関する新聞や雑誌の言説分析を行った。そのことは、大阪独自の音楽文化の一端を明らかにした点で、音楽受容研究において意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examines music programs produced by the Osaka Broadcasting Station (JOBK) before World War II, and considers the formation of musical taste among the people of Osaka at that time. First, we identified music programs featuring Austrian composer and conductor Joseph Laska (1886-1964), Japanese violist and conductor Takashi Asahina (1908-2001), and Russian violinist Alexander Mogilevsky (1885-1953). Next, the discourse in newspaper articles about the radio programs revealed that radio listeners received information about the performers and the pieces they played.

研究分野：音楽学

キーワード：ラジオ放送 大阪 音楽受容 ヨーゼフ・ラスカ 朝比奈隆 アレキサンダー・モギレフスキー

1. 研究開始当初の背景

従来、1925年から日本でも始まったラジオ放送の音楽番組の研究の多くは、東京放送局(JOAK)を軸にして行われてきた。1928年11月から全国中継放送が始まったものの、1934年6月までは各放送局の独自性は保たれていた。とりわけ大阪放送局(JOBK)は、JOAKに対抗して、独自の音楽番組を制作していた。JOBK圏内ではJOAK圏内とは異なる音楽番組が多数放送され、大阪のラジオ聴取者は、独自の音楽趣味(musical taste)を形成していたと考えられるが、JOBKを軸にした音楽番組の研究は遅れていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オーケストラを中心に戦前のJOBKの音楽番組を中心にデータベースを作成し、その上でオーケストラの出演番組および演奏曲目の傾向が、同時期の大阪の音楽文化のなかに位置づけること、また音楽番組に関する新聞や雑誌の言説分析も行うことによって、どのような音楽趣味が形成されたのかを明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) NHK放送博物館で閲覧できるJOBKの『番組確定表』を基礎資料として、音楽番組のデータベースを作成した。また必要に応じてJOAKの『番組確定表』および『洋楽放送記録』も参照した。

(2) 音楽番組に関連する新聞や雑誌の記事を収集し分析を行った。具体的には、JOBKの番組であっても、JOAK圏内でも放送されることがあるため、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『大阪時事新報』といった地方紙に加えて、『読売新聞』『都新聞』『日刊ラヂオ新聞』も調査した。また日本放送協会が発行していた『調査月報』『調査時報』『放送』に加えて、『音楽公論』『音楽世界』などの音楽雑誌の記事も調査の対象とした。

4. 研究成果

研究実施の初期段階での目的は、1925年6月(JOBKの開局)から1934年6月(日本放送協会の機構改革前)までのオーケストラが出演した音楽番組を軸に考察する計画であったが、音楽番組全体および出演者の調査を深めていくなかで、オーケストラに限定しないことにした。その結果、ラジオ番組を軸として1920年代から1930年代の阪神間の音楽文化を再考するという、次の研究課題が浮き彫りなり、またその作業なしには、この時期の大阪のラジオ聴取者の音楽趣味を論じることに限界があることも明らかになった。

本研究の期間内の主な成果は、以下の3つである。

(1) ヨーゼフ・ラスカ(1886-1964)が出演した番組

オーストリアの指揮者で作曲家のラスカは、1923年から1935年8月まで日本に滞在し、宝塚交響楽団の指揮者としてだけでなくピアニストとしても関西を中心に活動した。彼の日本での活動のなかで、ラジオ放送の出演はこれまで明らかになっていなかった。

JOBKの音楽番組に、ラスカは宝塚交響楽団を指揮して1931年から1933年に出演していたが、それ以外に大阪放送交響楽団や合唱の指揮者として、さらにピアニストとしても声楽の伴奏や室内楽に出演していたことが明らかになった。なおその中の室内楽では、ラジオ放送で日本初演された曲も含まれていた。

ラスカがラジオ番組に出演していた時期に、1928年11月8日に全国中継放送が開始され、1934年5月に日本放送協会が機構改革を行っていくなかで、彼が出演した音楽番組の位置づけが変化していったことが確認できた。さらにラスカ指揮のオーケストラ出演した音楽番組が、JOAKからの中継による日本放送交響楽団(新交響楽団)の番組や朝日会館での新交響楽団での演奏会との関係のなかで受容されていたことが明らかになった。

(2) 朝比奈隆(1908-2001)が出演した番組

朝比奈隆は戦後、大阪フィルハーモニー交響楽団を設立した指揮者として知られているが、戦前、ヴァイオリン奏者、ヴィオラ奏者、また大阪ラヂオオーケストラや大阪放送交響楽団に指揮者としてラジオ番組に出演していた。ラジオ番組の出演に加えて、大阪での演奏会の出演についても調査を行い、大阪という都市のなかに朝比奈の活動を位置づけた。

まず、朝比奈は1932年に大阪室内楽協会のヴィオラ奏者としてラジオ番組に出演し、初めて公の場に登場した。以後、大阪室内楽協会のメンバーとして、ラジオ番組と演奏会の両方の場で活動を繰り広げた。1934年からは大阪ラヂオオーケストラのメンバーと共演を重ねていった。こうした活動から、ヴィオラ奏者としての朝比奈が、ラジオ番組と演奏会との両方の場によって初期のキャリアを築き上げていったことが明らかになった。

次に指揮者として朝比奈は1936年にデビューすると、次第に指揮者としての活動に比重を置

くようになった。指揮活動において、朝比奈は演奏会での活動を展開し評価が定まってから、1938年にラジオ番組に出演していたことが分かった。

(3) 「系統的定期演奏」でのアレキサンダー・モギレフスキー(1885-1953)の演奏曲

「系統的定期演奏」は、JOBKの文芸課長の奥屋熊郎によって考案され、1930年3月から1934年5月まで放送された番組である。この番組で、ロシアのヴァイオリニストのアレキサンダー・モギレフスキーは中核を担った。モギレフスキーは1926年に初来日、1930年に再来日以降、日本に滞在し、演奏家として教師として活動したのち1953年に亡くなった。

JOBKが制作した「系統的定期演奏」が全国中継されたのはごく一部であり、この番組の演奏曲は、そのすべてが放送されたJOBK管内の音楽趣味の形成に貢献したと考えられる。モギレフスキーが「系統的定期演奏」で演奏した曲の傾向は、「名曲定期演奏」と銘打たれていたにもかかわらず、現在でもレパートリーとして定着していない曲も多数、含まれていた。しかし、それは、すでに多くの人に受け入れられている曲以外も放送することで、娯楽の水準を高めるという奥屋の方針に沿うものであった。

大阪で早くからラジオ欄を掲載した『大阪時事新報』の記事の言説から、ラジオの聴取者が「系統的定期演奏」が大きな意義をもつことを意識し、モギレフスキーについての音楽的また個人的な情報を知り、曲の特徴をイメージしていたことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西村理
2. 発表標題 JOBKの音楽番組におけるアレキサンダー・モギレフスキー 「系統的定期演奏」を中心に
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西村理
2. 発表標題 JOBKの洋楽番組におけるヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団 大阪の音楽文化における役割
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 土田英三郎ゼミ有志論集編集委員会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東京藝術大学出版会	5. 総ページ数 635
3. 書名 音楽を通して世界を考える 東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------